

福祉の視点から見た服飾文化の形成について
— 日欧服飾文化の比較と教育プログラムの開発 —
Formation of Clothing Culture from the Welfare Perspective:
Development of an Educational Program and Comparison of Japanese and
European Clothing Cultures

斉藤 秀子*¹⁺, 丸田 直美*²⁺, 菊池 直子*³⁺, 加藤 登志子*⁴⁺
Hideko Saito*¹⁺, Naomi Maruta*²⁺, Naoko Kikuchi*³⁺ and Toshiko Kato*⁴⁺

*1 山梨県立大学人間福祉学部 山梨県甲府市飯田五丁目 11-1
Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University
5-11-1 Iida, Kofu-shi Yamanashi 400-0035 Japan

*2 共立女子大学家政学部
Faculty of Home Economics, Kyoritsu Women's University

*3 岩手県立大学盛岡短期大学部
Morioka Junior College, Iwate Prefectural University

*4 文化ファッション大学院大学ファッションビジネス研究科
Graduate School of Fashion Business, Bunka Fashion Graduate University
+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : The purpose of our study is to examine the formation of a desirable clothing culture from a welfare perspective by comparing Japanese clothing cultures with Northern European ones, and to contribute the formation of Japanese clothing culture by developing an educational program in welfare.

In 2008, we investigated elder care in Kuji City, Iwate Prefecture, from the welfare clothing perspective. Also, we investigated situations of production and sales of clothing in welfare clothing production in Tokyo, Osaka, and some other cities. In 2009 and 2010, we did the same research in Sweden, in which we compared the Japanese clothing cultures with the Swedish one from the welfare perspective and examined the state of clothing for care in the two countries. Then we examined classes on welfare in fashion creation education for disabled people, discussing how to put our ideas into practice. As a result we found a new direction in the development of the educational program in welfare.

要旨:本研究の目的は、日本と北欧の服飾文化の比較をとおして、望ましい服飾文化の形成について検討、および、福祉に関わる服飾に関わる教育プログラムを開発することにより、日本の服飾文

*1) saito@yamanashi-ken.ac.jp

化の形成に寄与することである。

平成 20 年、岩手県久慈市において衣生活を中心としたケア、衣服供給の現状について調査した。また東京都、大阪市等において、福祉に関わる衣服の製造、販売の現状について調査した。さらに、平成 21 年、22 年、スウェーデンにおける同様の調査を実施、両国の福祉に関わる衣生活の現状について比較、考察した。また、平成 21 年、22 年、身体障害者を対象とするファッションクリエイションの研究授業を実施し、その方法について検討し、福祉に関わる教育プログラム開発の方向性を得ることができた。

配当決定額

平成 20 年度	510,000 円
平成 21 年度	1,080,000 円
平成 22 年度	1,140,000 円
合計	2,730,000 円

研究の目的

高齢化が進む日本において、福祉に関わる服飾文化の形成は急務である。すなわち、いつでも、誰でも、どこでも、衣服について困難な状況にあるときに、問題解決のためサポートされることを可能とする服飾文化の形成である。しかし、日本において、福祉に関わる服飾文化を服飾関連のビジネス、デザイン開発、ケアの方法、教育等を俯瞰して研究した事例はなく、服飾文化形成への提言は行われていない現状にある。

このような背景のもと、本研究の目的は、様々の側面からの日本と北欧の服飾文化の比較を通して、どのような服飾文化の形成が望ましいかについて検討すること、さらに、これを普及するための教育の可能性を探ることを、日本の福祉に関わる服飾文化の形成に寄与することである。

研究の方法

スウェーデン、ストックホルムにおける平成 19 年 9 月の先行調査を基に、スウェーデンにおける福祉に関わる衣生活についての調査を行う。日本においては、岩手県久慈市をモデルケースとして、地域の現状、福祉文化の現状、福祉に関わる服飾関係産業の状況、介護福祉関連施設でのケアの状況について調査を行う。モデルケースおよび日本全体の服飾文化の現状と北欧の現状とを比較し、よりよい服飾文化形成の在り方について考察する。

また、文化ファッション大学院大学在学中のファッション関係に就業希望の学生を対象に、高齢者、身体障害者を対象としたインタビュー、服のデザイン、CAD によるパターンの作成、縫製という一連の作業を進める、ファッションクリエイションの研究授業を実施し、その方法論について検討する。

研究の実施計画

【平成 20 年度】

1) 日本における福祉に関わる服飾文化の現状調査

岩手県久慈市を対象に岩手大学地域連携推進センター、久慈市産業振興部、介護衣服販売業者および縫製工場の協力を得、福祉関連服飾産業、高齢者施設でのケアの状況について調査を行う。

2) 日本における福祉に関わる被服の製造、販売についての現状調査

東京および大阪の高齢者、身障者向けの工夫のあるデザインを製造、販売している服飾関連企業等を対象に調査を行う。また、情報収集のため平成 20 年度被服構成学部会公開講座「生活の質を高める衣服—おしゃれに生きる—」に出席する。

【平成 21 年度】

1) 日本における福祉に関わる服飾文化の現状調査

東京における、高齢者対象の衣服オーダー、高齢者対象の食事用エプロンの製造会社、福祉に関わるリフォーム会社、高齢者のためのニット製造会社の調査を行う。

2) スウェーデンにおける福祉に関わる服飾文化の現状調査

スウェーデンストックホルム市およびこの近郊における次の調査を実施する。

- ・障害者または高齢者の洋服を作っている会社訪問とインタビュー
- ・高齢者向けの衣服の訪問販売、ファッションショーの見学と主催者へのインタビュー
- ・若年の障害を持つ方の衣生活についてのインタビュー
- ・メイクアップサポートの見学とインタビュー
- ・障害者のための用具、衣服販売店、障害者のためのパターンオーダー衣服の販売店訪問
- ・メーラダーレン大学における衣生活に関わる研究者訪問、インタビュー

3) 福祉に関わる被服教育、研究授業実践

文化ファッション大学院後期(平成 21 年 9 月～平成 22 年 1 月)の演習授業を事例として、15 回の授業計画および指導案を作成、研究授業を行う。

4) 研究内容についての学会報告

日本衣服学会第 61 回年次大会において、スウェーデンにおける調査内容について報告する。

【平成 22 年度】

1) 国内の福祉に関わる衣服についての現状調査

国内の福祉に関わる衣服の現状についての情報収集を行う。

2) スウェーデンにおける福祉に関わる服飾文化の調査

特に寝たきり高齢者、あるいは病院における衣服のあり方、衣服の販売状況について調査を行う。

3) 福祉に関わる被服教育、研究授業実践

文化ファッション大学院大学後期(平成 22 年 9 月～平成 23 年 1 月)の演習授業を事例として、15 回の授業計画および指導案を作成、研究授業を行う。

4) 研究内容についての学会報告

日本衣服学会第 62 回年次大会において、平成 22 年度スウェーデンでの調査内容、平成 21 年度研究授業実践の内容について報告する。

5) 研究内容の取りまとめと報告書の作成

平成 20 年～22 年度の研究内容を取りまとめ、服飾文化共同研究報告書を作成するとともに、最終報告書を作成する。

研究の成果

本研究での調査対象は表 1 のとおりである。本報告では、スウェーデンでの調査結果、および身体障害者を対象としたファッションクリエイション研究授業について述べる。

1. スウェーデンにおける福祉に関わる服飾文化についての調査

<平成 21 年度スウェーデン調査>

Åsa Stenmark Design 社の製品はいずれも Åsa 氏によるものであり、現在スウェーデンおよびデンマークの 8 軒のブティックからイーージーオーダーの注文を受け、販売されていた。衣服の製作は外国籍の男性 1 名、女性 2 名で行われており、約 2 週間で注文者の手元に届く。衣服の外観は一般の衣服と同様であることをコンセプトとし、その上で、高齢者、身障者のための様々の工夫がある。

福祉機器販売店、URIFORM には、上記、Åsa 氏デザインの衣服を始めとして、注文販売による衣服が展示、販売されていた。食食用エプロンは販売されていたが、日本のいわゆる介護用品店と異なり、下着やパジャマの販売は行われていない。

高齢者のミーティングポイントでのファッションショーは、年金受給者協会の月 1 回の会合の直後に、同協会と衣服訪問販売会社のタイアップで行われていた。本訪問販売はフランチャイズによるものであり、社員 1 名が車一台で衣服を運搬、展示、ショーの衣服の準備、ショーの進行、販売を行う。ショーのモデルは高齢者で、年金受給者協会会長により選出され、高齢者自身がファッションショーやショッピングを楽しむ様子が観察された。

市内ミーティングポイントでの高齢者のインタビューによれば、健常な高齢者の衣服について困っている点は日本と同様にサイズ、特に袖やズボンの長さであった。高齢者向け衣服販売店では、ストレッチ布による衣服、靴下も販売されており、それぞれ別の店舗に行かなくて済む。また、この地域の病院内の売店では、下着等も販売されているが、靴が数多く販売されている点が特徴であった。

デイケアセンターでのメイクアップサービスは具体的にはデイケアセンター内での有料の女性のヘアセット、男性の散髪のサービスであった。デイケアセンター責任者によれば、現在の高齢者は若年の時に化粧をする習慣がなかったもので、若年の時の状況、すなわち、これまでの習慣に合わせたサービスとして

Table 1 Research sites visited (Japan and Sweden)
調査対象(日本・スウェーデン)

日本	
地域の高齢者の衣生活	特別養護老人ホームぎんたらず久慈
	元気の泉(訪問介護、デイサービス等)
	養護老人ホーム養寿荘
	介護老人保健施設リハビリタウンくじ
	独居高齢者宅
	中央介護センター(有)
地域での高齢者の衣服販売	(有)ホソタ薬局
	ショッピングロードフジモリ久慈店
	スーパーまるこ
	地域の朝市
福祉に関わる衣服の製造、販売	フランスベッドメディカルサービス
	衣装工房Kurian
	(株)ワコール
	(株)メディカル四国はるうらら館事業部
	(有)アクティア
	フットマーク(株)
スウェーデン	
高齢者の衣生活	高齢者向けミーティングポイント
	デイケアセンターでのメイクアップサポート
	Fruängsgården(ナーシングホーム)
	Rio servicehus(ケアハウス)
障害者の衣生活	車椅子利用者
	DHR(身障者の協会)
福祉に関わる衣服の製造、販売	Åsa Stenmark Design
	URIFORM
	高齢者向け衣服販売店
	病院内売店
	高齢者のためのファッションショー
	Sveriges Senior Shop
Klädvalet Sverige	



Fig. 1 Fashion show
ファッションショー



Fig. 2 Jacket
ジャケット

いるとのことであった。

車椅子利用の若年男女のインタビューを行った。男性は脳性麻痺のため電動車いすを使用し、衣服についての特段の工夫はなく、車いす用のレインコートを使用していた。女性は、一般の車いすで、車いすに対応した衣服の工夫を数多く行っていた。特に、椅座位のため、前見頃が短い上着を選択する、ズボンは後ろ股上を長くする、上肢運動時の上着のずり上がりを防ぐ工夫を行っていた。

<平成 22 年度スウェーデン調査>

Klädvalet Sverige の経営者である Ann Segerstrom 氏は、20 年間介護職に就いた経歴をもつ。2005 年に介護用衣服の会社を立ち上げ、2010 年 9 月から店舗販売を開始した。販売される衣服は、背面や側面、両肩等で着脱できるもの、衣服圧に配慮したものの、撥水・防水性の素材を考慮したもの等で、いずれも一般の衣服と同様の外観であった。重衣料から中衣料、軽衣料、小物に至るまで取り扱う種類が多く、カナダ等の輸入製品、スウェーデン国内製品の他、Ann 氏のデザインによる製品も販売されていた。

Senior Shop は、フランチャイズの高齢者向け衣服の販売会社である。チェーン店の Vibeke 氏は、親会社からロゴ入りワゴン車と商品を購入し、指定された特定地域の高齢者施設を訪問して販売する。おしゃれなデザインが多く、高齢者のみではなく、施設のスタッフも購入していた。

身体障害者の協会 (DHR) のインタビューでは、寝たきりの高齢者は基本的におらず、特別に工夫された衣服はそれほど必要ないが、容易な着脱、やわらかい素材、ゆとりが必要とのことであった。また、身障



Fig. 3 Clothing shop of Klädvalet Sverige company
Klädvalet Sverige 社の衣服販売

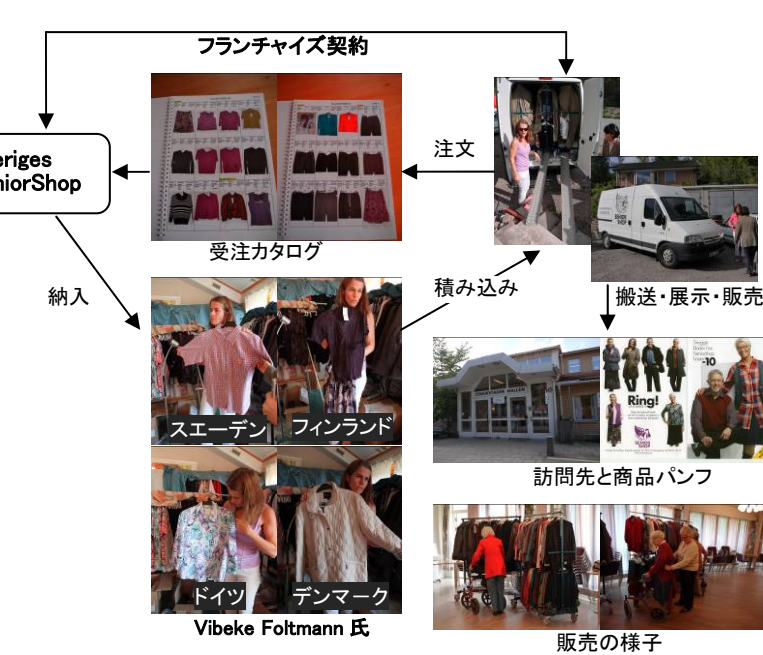


Fig. 4 Sveriges Senior Shop's direct distribution of clothing at institutions
Sveriges Senior Shop の衣服販売

者の衣服は損耗しやすいが、衣服の購入やリフォームの経費を国に援助申請することは難しいとのことであった。身障者向け衣服の購入では、インターネットを利用し外国(ドイツ等)製品を購入していた。

以上、二回にわたる調査により、スウェーデンにおいては、日本と異なる福祉に関わる服飾文化が形成され、服飾ビジネスが展開されており、日本の現状と比較、検討することにより、日本の服飾文化の形成についての示唆が得られることが明らかとなった。

2. 身体障害者を対象としたファッションクリエイションの研究授業

＜平成 21 年度研究授業＞

平成 21 年 9 月～平成 22 年 1 月、文化ファッション大学院大学「アパレル人間工学Ⅱ」の授業を利用して研究授業を行った。本授業の履修者は 12 名（ファッションクリエイション専攻 1.2 年）で、全員が服作りのできる学生である。被服製作の対象者は、東京都で職業訓練を受けている学生 7 名（男性 4 名、女性 3 名）である。

表 2 に研究授業のスケジュールを示す。全 15 回の授業のうち、前半の 1/3 (5 回) は、福祉に関する現状や問題点などに加えて、工夫された衣服デザイン例を紹介することによって、履修者の衣に関する福祉の現状理解と、クリエイション活動対象者訪問準備のための授業とした。これらの授業のポイントは、一連の研究で得られたスウェーデンの衣服情報を中心に数多くの衣服の工夫例を示したことである。後半の 2/3 (10 回) で身体障害のある対象者へのクリエイション活動を行なった。表中に網掛けで示した 3 回は（初回のみ 2 コマ）対象者施設への訪問を行った。1 回目は施設見学と対象者へのインタビュー、2 回目は仮縫い、3 回目は完成した衣服の試着会と評価とした。授業開始にあたり、本研究授業の主旨を説明、合意を得た上で、授業を進めた。各授業については授業案を作成し、授業の前後、および初回施設訪問後にアンケートを実施した。作品試着会終了後には対象者に対してもアンケートを行った。

Table 2 Course schedule in 2009
平成 21 年度研究授業スケジュール

授業数	日	曜日	授業内容
1	9/25	金	本授業の内容についての説明
2	10/1	木	国際福祉機器展に参加
3	10/9	金	高齢者、障害者の衣服に関しての現状や問題点について説明
4	10/23	金	高齢者、障害者のための衣服の工夫事例を紹介し、デザイン発想を促す
5	11/13	金	クリエイション活動対象者訪問準備
6・7	11/16	月	クリエイション活動対象者を訪問① (施設見学、インタビュー)
8	11/20	金	副資材についての説明とパターン製作
9	11/27	金	仮縫い
10	11/30	月	クリエイション活動対象者を訪問② (仮縫い、補正等打合せ)
11	12/4	金	本縫い
12	12/11	金	本縫い
13	12/18	金	本縫い
14	12/21	月	クリエイション活動対象者を訪問③ (試着会、評価)
15	1/8	金	本授業の反省と自己評価

事前学習において示した福祉にかかわる衣服情報においては、特にスウェーデンの福祉事情や作品に対して興味を示す学生が多く見られた。衣服製作においては、12 名の履修者がグループに分かれ 7 名の対象者の衣服を製作した。製作した作品はニット製品を中心にジャケット 3 着、パーカー、ケープ、トレーナー、パンツ各 1 着であった。図 5 に製作した衣服（ケープとジャケット）を示した。対象者からは履修者の対応状況、製作衣服について、大変よい評価を得た。履修者のアンケート結果を見ると、本授業に対してある程度満足していると答えた履修者が多かった。しかし、本研究授業の対象者は社会復帰の目的で職業訓練中であり、障害の程度も比較的軽かったため、既製衣服に対しての不満も少なかったと考えられ、クリエイション活動にもの足りなさを感じた履修者もいた。自由回答結果より、身体障害者に対するクリエイション活動に必要なことは何か、という質問に、「必要な機能を活かしたデザイン」「着脱のしやすさ」など機能性面をあげるとともに、「対象者とのコミュニケーション」「障害に対する知識・理解」など、対象者を理解しコミュニケーションをとることの必要性についての回答もみられた。さらに、「障害者だとはわからない衣服を作る工夫」など、ユニバーサル



Fig. 5 Examples of clothes made in 2009
平成 21 年度製作衣服例

デザインへの意識も伺えた。また、本授業を通してよかったことは、という質問に対しては、製作技術に関することと同時に、「障害者に接することができた」など、普段の履修内容とは異なった対象でのクリエイション活動をあげた学生もみられた。研究授業としては、対象者の性別、体型、障害の種類などが異なっていたことにより、一律の流れで授業を進行することが困難であったことなど授業の進め方等に課題は残った。本研究授業を行うことにより、事前学習とクリエイション活動とのつながりや、効果的な授業の進め方についてさらに検討が必要であることが明らかとなった。

<平成 22 年度研究授業>

平成 22 年 9 月～平成 23 年 1 月、文化ファッション大学院大学「ファッションテクノロジー演習 II」(クリエイション専攻テクノロジーコース 2 年)

の授業において行った。被服製作の対象者は、(社)日本リウマチ友の会会員の女性 4 名(60～70 歳)である。授業の履修者は 9 名である。

表 3 に研究授業のスケジュールを示す。全 15 回の授業の流れは前回の研究授業とほぼ同様に、前半の 1/3 を事前学習、後半 2/3 をクリエイション活動とした。本授業は 2 コマ続きであったため、対象者との 2 回の面接は 2 コマでおこなった。前回の研究授業と大きく異なる点は授業開始前に教員(2 名)が対象者に対してヒアリングを行ったことである。これは、クリエイション活動の事前学習(福祉に関する現状や問題点の説明、工夫された衣服デザイン例の紹介)に、クリエイション活動対象者の障害や日常の衣生活情報の提供を加えることにより、履修者にクリエイション対象者についてのより具体的な理解を促すためである。また、履修者が対象者と面接する前により具体的な情報を得ることにより、企画案の作成が可能となり、事前学習とクリエイション活動のつながりもよくなるのではないかと考えたためである。

前半 5 回の事前授業終了後、クリエイション活動を行った。履修者は 3 回、対象者と面接し、そのうち 2 回は対象者の大学訪問により大学で授業を行った。3 回目授業は、履修者がリウマチ友の会本部を訪問し、対象者の試着会、および、対象者と同本部同席者による評価とした。

クリエイション活動において、9 名の履修者がグループに分かれ 4 名の対象者の衣服・服飾雑貨を製作した。製作した作品は布帛を中心に、図 6 に示すジャケット、ベスト、ブラウス各 1 着、バッグ 1 個であった。対象者は日常における衣服の着脱、生活行動において不自由を感じていたため、履修者は衣服の衿ぐりのあき、第一ボタンの位置、ボタンの大きさ、着丈、袖丈など細部にわたって工夫をし、作品を完成させ

Table 3 Course schedule in 2010
平成 22 年度研究授業スケジュール

授業数	日	曜日	授業内容
1・2	9/30	木	本授業の内容についての説明 国際福祉機器展に参加
3	11/11	木	高齢者、障害者、リウマチ患者に関しての現状や問題点について説明 高齢者、障害者のための衣服の工夫事例を紹介し、デザイン発想を促す
4	11/18	木	グループ別企画会議、コンセプト・製作アイテムの大枠を決める
5・6	11/25	木	対象者来校、グループごとに企画案提示及び検討
7・8	12/2	木	副資材についての説明、パターン・ワフル仮縫い作成
9・10	12/9	木	対象者来校、グループごとに試着、仮縫い及び企画案最終検討
11・12	12/16	木	仮縫い修正後、実物製作、仕上げ
13・14	12/24	金	日本リウマチ友の会訪問(試着会、評価)
15	1/6	木	本授業の反省と自己評価

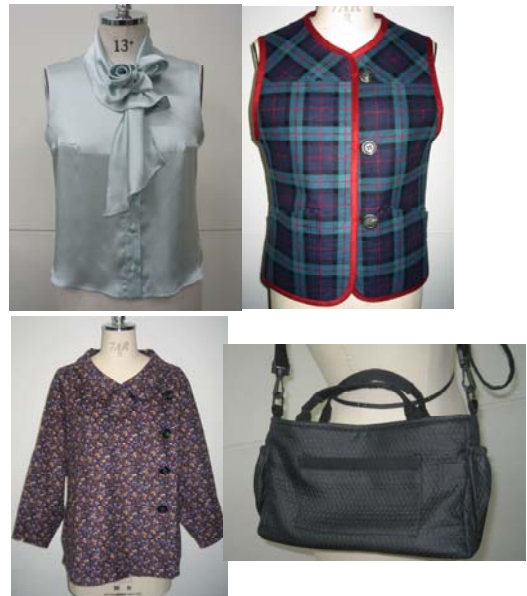


Fig. 6 Clothes and bag made in 2010
平成 22 年度製作衣服・バッグ

た。

本研究授業は、前回の研究授業よりもパターン、縫製技術においてより高度な技術をもつ学生のクラスで実施したため、完成度の高い作品を仕上げることができ、対象者からも非常に評価を得た。授業の進め方としては、事前ヒアリングを行ったことで対象者との1回目の面接において企画案を提示することができ、履修者のクリエイション意欲につながったと考えられる。また、対象者との意見交換によってその企画案が改良され、対象者にとっても満足いく作品となったと考えられ、事前ヒアリングの効果が伺えた。また、対象者全員が同一の疾患をもつ女性であったことで、履修者のクリエイション対象者に対する理解がより深まり、授業をスムーズに、一律の流れで進行することができた。

授業終了後のアンケート調査より、本授業を通して得られたことについて、「クリエイション活動を通しての社会貢献」「人のために作る気持ち」をあげる履修者が多かった。また、「衣服の着脱は人間の身体機能に頼っていることがわかった」という意見もあり、障害を持つ人々とのコミュニケーションを通しての服作りによって、これまでとは異なったクリエイション活動を体験することができたと考えられる。

以上、二回の研究授業により、身体障害者を対象としたファッションクリエイションの授業は、被服のクリエイション活動を希望している学生に、新たな視点をはぐくみ、福祉を視野に入れたクリエイション活動による服飾文化の形成の一助となることが示唆された。

主な発表論文等

【学会発表】

平成 21 年 11 月 7 日(土) 日本衣服学会第 61 回(平成 21 年度)年次大会

斉藤秀子、丸田直美、加藤登志子、菊池直子

「スウェーデンにおける福祉に関わる衣生活の現状調査」

平成 22 年 10 月 16 日(土) 日本衣服学会第 62 回(平成 22 年度)年次大会

菊池直子、加藤登志子、丸田直美、斉藤秀子

「福祉に関わる衣生活の現状についての国際比較—スウェーデンでの調査を中心に—」

丸田直美、加藤登志子、菊池直子、斉藤秀子

「福祉に関わるクリエイション教育プログラム開発のための研究授業の試み」

【その他】

平成 21 年 12 月 19 日(土) 第 91 回縫製研究会講演 斉藤秀子

「スウェーデンにおける福祉に関わる衣生活の現状と身障者のためのファッションデザイン」

平成 21 年 12 月 16 日(木) ユニバーサルファッション製品の企画開発研究会講演 斉藤秀子

「スウェーデン視察情報—福祉に関わる衣生活の現状について—」

参考文献

1. 大熊由紀子:「寝たきり老人」のいる国いない国—真の豊かさへの挑戦、ぶどう社(1990)
2. ビヤネール多美子著:スウェーデン・超高齢化社会への試み 変わり行く制度、変わらない理念、ミネルヴァ書房(1998)
3. 大竹美登利(編):新版 テキストブック 家庭科教育、学術図書出版社(2003)

謝辞 文化ファッション研究機構、調査・研究授業協力者の皆様